

## はじめに

池上重弘（静岡文化芸術大学文化政策学部）

### 1. 本報告書の位置づけと性格

本報告書は、2006年度に静岡文化芸術大学（研究担当者：池上重弘）が浜松市国際課より受託して実施した「浜松市における南米系外国人の生活・就労実態調査」（以下、浜松市外国人調査）のデータをもとに、テーマごとの詳細な分析結果をまとめた報告書である。浜松市外国人調査については、すでに2006年3月に単純集計結果をまとめた報告書が浜松市国際課から発行されているし、報告書のポルトガル語版については浜松市公式ウェブサイト上で閲覧可能となっている。<sup>1</sup>

この報告書は、そこから歩を進め、浜松において多文化共生の諸活動に関わっている市民との意見交換を通じて、地域のニーズを反映した分析視点を導入し、統計的な手法を用いた実態把握にもとづいて施策の方向性を示すことを目的とする。さらに、本報告書の成果をもとに、意見交換に応じてくれた市民が各々の活動する現場での経験をふまえて政策提言の機会を持つ。<sup>2</sup> このように、本報告書は、調査結果をもとにした市民との意見交換から分析のヒントを得ると同時に、分析結果を市民による政策提言の基礎資料として還元するという意味で、学問と実践の間における循環的なコミュニケーションのツールであるともいえるし、このような研究を「協働研究」と名付けることも可能だろう。

### 2. 浜松市のこれまでの調査と本調査の特色

2007年3月末日現在、浜松市における外国人登録者は3万2千人を超え、総人口の約4%を占めている（図1）。そのうちブラジル国籍者は1万9千人を超え、広く知られているように、全国の市町村で最多の登録数となっている。浜松市は1990年の改定入管法施行以来、急速な南米系外国人の増加に直面し、全国の自治体に先駆けた対応を進めてきた。施策推進の基礎資料収集を目的とする外国人市民の実態把握にも早くから取り組んでおり、これまでに1992年、1996年、1999年、2003年の4回、外国人市民の大半を占める南米系の人びとを対象とした実態調査を市が実施している（2000年には非南米系外国人を対象とした小規模調査も実施）。とくに1992年・1996年の調査は東洋大学社会学部の故喜多川豊宇教授が市から受託して実施しており、その後の調査もこの2回の調査の枠組みを基本的に踏襲している。

2006年の調査はそれらの継続調査としての性格を有し、浜松市が南米系外国人市民の生活

---

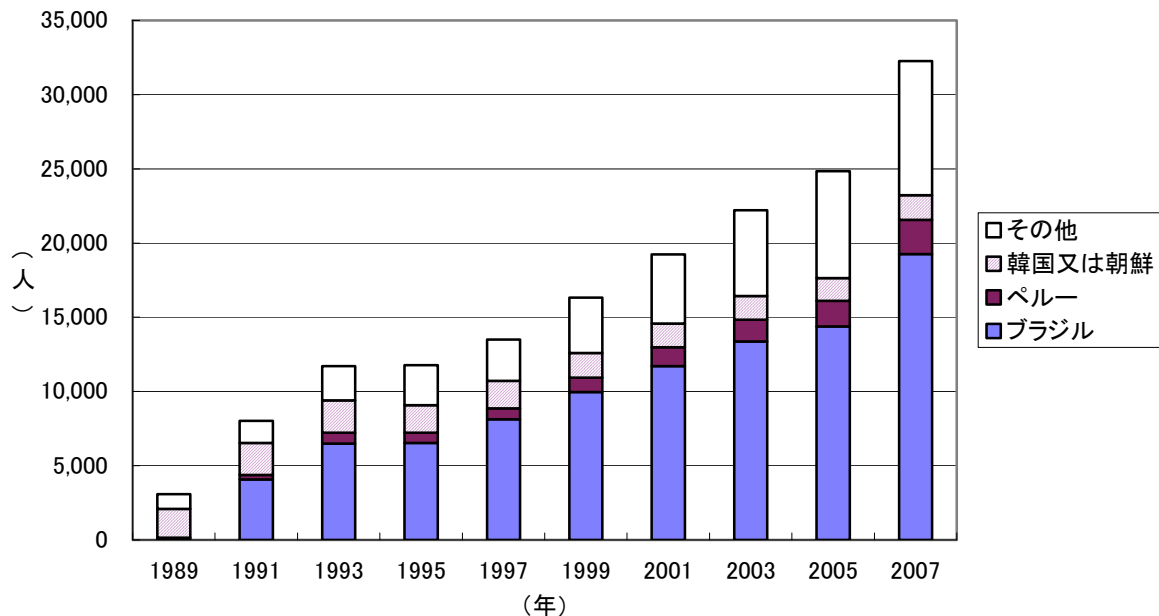
<sup>1</sup> 報告書のポルトガル語版については、浜松市の外国人市民向け情報提供サイト「カナルハママツ」のポルトガル語ページにて閲覧可能である。

[http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamapo/20\\_whatsnew.html](http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamapo/20_whatsnew.html)

<sup>2</sup> 2008年3月23日に静岡文化芸術大学にて開催するシンポジウム、「浜松市民が考える多文化共生～浜松市外国人調査をもとに～」(SUAC文化芸術セミナーとして開催)。

や就労の実態を把握し、地域共生に関する施策の参考とするために実施された。それと同時に、この調査は、浜松市における国際化の指針である「新・浜松市世界都市化ビジョン」を2007年度末までに策定するにあたっての基礎資料となることも期待された。

図1 浜松市における外国人登録者数の推移（1989年～2007年、各年の3月末日現在）



出典：浜松市外国人登録資料（2005年7月1日に12市町村が合併）

2006年の浜松市外国人調査については、前述の通り、静岡文化芸術大学が受託したが、実際の企画立案と実施は、以下に記す研究チームによって行われた。

調査受託者

静岡文化芸術大学（研究担当者：池上重弘 文化政策学部 准教授）

研究協力者

イシカワ エウニセ アケミ（静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授）

竹ノ下弘久（静岡大学 人文学部 准教授）

千年よしみ（国立社会保障・人口問題研究所 国際関係部 第一室長）

2006年の調査がこれまでの調査と異なるのは、次の3点である。すなわち、①従来の調査と比較して回収数が多い点（これまでの2倍から5倍）、②外国人登録原票からの無作為抽出、外国人雇用企業経由、外国人学校経由、公立小学校経由など、多様な経路で調査票を配布・回収した点、③浜松市における従来の調査票を参考にしながらも、質問形式や選択肢をより詳細に設定し、さらにストレスや社会的ネットワークなど、これまであまり着目されてこなかった新たな調査項目を盛り込んだ点である。具体的な調査項目は以下に記す12の領域にまたがっている。

①基本属性	(20項目)	⑦地域生活	(4項目)
②雇用・労働	(13項目)	⑧アイデンティティ	(4項目)
③居住	(3項目)	⑨日本語学習	(8項目)
④医療・保険	(7項目)	⑩行政サービス	(1項目)
⑤ストレス	(3項目)	⑪教育	(7項目)
⑥社会的ネットワーク	(7項目)	⑫母国との関係	(3項目)

### 3. 協働研究の一環としての意見交換

2007年7月から9月にかけて、研究チームのメンバーのうち池上とイシカワが、浜松市外国人調査の単純集計結果をまとめたパワーポイント資料（巻末の付録1）を用いながら、以下に示す会合の折に調査結果を紹介し、意見交換の機会を持った。

	会合	日時(2007年)	会場	説明者
1	外国人労働者と共に生きる会・浜松 (へるすの会) 総会	7月11日(水)	静岡県西部地域 交流プラザ	イシカワ
2	浜松市立砂丘小学校意見交換会	8月1日(水)	砂丘小学校	池上
3	浜松日本語ネットワーク準備会	8月18日(土)	静岡文化芸術大学	池上
4	平成19年度 市町人権教育連絡 協議会 第2回学校教育部会	8月21日(火)	浜松市教育委員会	池上
5	砂丘自治会定例会合	8月22日(水)	砂丘会館	池上
6	「共に生きる」教材を考える会	8月29日(水)	浜松国際交流協会	池上
7	日本公文教育研究会浜松事務局 「日本語オープン自主研」	9月12日(水)	日本公文教育研究 会浜松事務局	池上

これらの会合での意見交換においては、雇用・労働、医療・保険、教育、日本語学習、居住、地域生活など、多方面にわたる質問に研究チームのメンバーが答え、一方で現場の知見にもとづくコメントや指摘を受けることができた。これらの機会には、池上ないしイシカワのゼミ学生が複数名同行し記録を作成した。学生たちの作成した記録を研究メンバーで共有し、その後の分析に際して参考にした。

### 4. 本報告書の構成

本報告書は以下、テーマごとにまとめられた7つの章と、4つの付録資料から構成される。

池上と竹ノ下による1章は、浜松市外国人調査の概要や特性を把握すると同時に、個別のテーマを扱う章では詳述できないがいずれの章においても重要な背景となる回答者の基本的属性について明らかにしている。

竹ノ下による2章では、雇用・労働が焦点となっている。学歴、職業、所得を獲得する機会の不平等に注目する階層研究の枠組みや知見を生かしながら、南米系外国人の職業や所得の動向と、それらを左右する要因について検討している。

3章において千年は、個人や世帯レベルの条件の違いにも着目し、健康保険の種類別に加算状況を分析した上で、加入を規定する要因について論じている。

池上が4章で取り上げるのは、南米系外国人の日本語能力をめぐる問題である。南米系外国人の定住化が進むなか、受け入れ社会の言語である日本語の修得をどのように支援するかについても考察している。

竹ノ下と西村の共著による5章は、これまで南米系外国人をめぐる研究であり注目されてこなかった、社会的ネットワークの構造と精神的健康との関係を取り上げている。南米系外国人に特徴的に認められる家族・親族同士で構成された同質的で閉鎖的なネットワークは、精神的健康面では一定の緩衝効果を有することを指摘している。

イシカワによる6章はポルトガル語で書かれているが、とくにブラジル人に焦点を合わせてアイデンティティの問題を論じている。子どもたちの置かれた生活環境を分析し、かれらは親たちとは異なるアイデンティティを形成していると結論づける。

7章を担当したマックスウェルは、竹ノ下が指導するブラジル人大学院生である。日本の学校とブラジル人学校の選択はどのような要因にもとづくのかを分析している。

付録として4つの資料が掲載されている。最初の資料は、協働研究の意見交換のためにイシカワゼミの学生が作成したパワーポイントの資料である。本報告書では単純集計結果を再録しなかったが、この資料を一覧すれば調査結果の全体像を理解することができる。続く3つは、調査票の日本語版とそこから翻訳したポルトガル語版およびスペイン語版である。今後類似の調査を実施する自治体や研究者の皆様に活用していただければ幸いである。

## 5. 協力者への謝辞

本研究は数多くの方々のご理解とご協力によって実現した。もともとは2006年の浜松市外国人調査の委託者ではあるが、実施に際して各方面との調整をしてくださった浜松市国際課のスタッフにはとくに謝意を表したい。外国人雇用企業との関係では、浜松中央警察署および同署の外国人雇用企業等連絡協議会にお世話になった。公立小学校経由の調査では、浜松市教育委員会、そして各学校のご理解をいただけたことに深く感謝している。さらに外国人学校の協力に対しても、この場を借りて感謝したい。そして何よりも、忙しい毎日のなかで、おそらくは疲れているにもかかわらず、大部にわたる調査票に回答してくださった外国人市民の皆様に厚く御礼申し上げたい。<sup>3</sup>

---

<sup>3</sup> 2007年度の研究は、静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究「多文化共生社会の実現に向けた静岡県西部地域からの情報発信」の研究助成を受けている。